

〈贈る言葉〉

小山薫先生との思い出

辻 英 子

小山薫先生には私が同志社女子大学に就職して以来、三十六年という長きに渡り、一方ならぬご高配を賜りました。共に過ごさせていただいた年月を振り返ると懐かしい思い出が次々と浮かんできます。

かつて同志社女子大学の英文学科(現・英語英文学科)では、3年次に「シェイクスピア研究」、4年次に「ミルトン研究」がそれぞれ必修科目として設置されていました。とりわけ「ミルトン研究」は学科科目の最高峰ともいえる存在でした。私自身も3年次でシェイクスピアの原文を、辞書と訳本に頼りながら、どうにか読み終え、ほっとしたのもつかの間、最終学年に出会ったミルトンの更なる難解さに頭を抱えてしまいました。こちらはいくら注釈を読んでも分からない箇所が山ほどあって、途方に暮れたものです。

母校に就職が決まった時、その難解なミルトンを専門にしておられる小山薫先生という大変優秀な先輩がいらっしゃるということを知り、お会いしたら何か高尚な話をしなければと少なからず気後れしていました。けれども、実際にお目にかかった小山先生は、柔らかい京都弁の優しく気さくな方で、私の下手な駄洒落にも大喜びしてくださり、たちまち緊張が解けました。

小山先生は新米の私を温かく迎え入れ、職場に溶け込ませてくださいました。当時、京田辺キャンパスにあった小山先生の研究室は、多くの教職員の方が集うちょっとしたサロンとなっていて、私も頻繁にお邪魔していました。会議などでは難しい顔をされてとつつきにくい印象だった先生方も、小山先生のお部屋でお会いする時には常に上機嫌で気さくな素顔を見せてくださいました。先生の研究室でいろいろな方々と楽しく語り合った時間を、今でもアールグレイの香りと共に鮮やかに思い出します。

今から思えば、三十年近く前までは、まだ、大学でも今よりゆったりとした時間が与えられていました。ある時は、今出川キャンパスの空き時間に、新緑の中、小山先生と二人で賀茂川のほとりを植物園まで散歩したこともありました。春・秋のリトリートやサマーキャンプでもご一緒させていただき、学生時代に戻ったように夜遅くまで話し込んだことも楽しい思い出です。

そんな牧歌的な日々も、世紀の変わり目と共に終わりを告げたように思います。小山先生が所属しておられた短期大学部が2000年4月に現代社会学部に改組され、先生は英語英文学科へと移られました。更に2009年4月には表象文化学部開設に伴い、英語英文学科が日本語日本文学科と共に今出川キャンパスに移転となり、日々の業務も増え、多忙な毎日となりました。小山先生は学生部長をはじめとして様々な重責を担い、連日、過酷なスケジュールをこなしておられ、かつてのように研究室でお茶の時間をご一緒することはできなくなりました。

そのような忙しい年月の中、思いがけず、また小山先生と親しく語り合える日がやってきました。2015年の暮れ、デントン館の耐震工事のため、私たち教員は数か月間、旧楽真館の3階にある仮研究室に移ることになったのですが、ちょうどその時、小山先生が学科主任で私が教務主任をしており、私たちは隣接する二部屋を仮研究室にすることになりました。小山先生と私の部屋はドアでつながっていて、連日、先生の研究室にお邪魔しては、学科の問題を話し合いました。のんびりとした京田辺時代とは異なり、出てくる話題は深刻なものばかりでしたが、どんなことにも誠実に向き合い、常に正確で丁寧な仕事をされる小山先生に支えていただくことによって厳しい日々を何とか乗り越えることができました。

小山先生と過ごさせていただいた年月、楽しかったことも共に苦勞したこともすべてが心に残る貴重な経験となっています。長い間、お世話になり、本当にありがとうございました。今後とも頼もしい先輩としてどうかよろしくご教示ください。益々のご健康とご多幸をお祈りしております。